

報告：

『地方都市「消滅」を乗り越える！ 岐阜県山県市からの提言』を出版して

岐阜の地域福祉実践・研究ネットワーク 副代表

中部学院大学人間福祉学部 教授

宮嶋 淳

I. はじめに

II. 本書を出版するまでの取り組み

(1) 研究の背景

地元は、隣人との関係の中で、一人ひとりが自分らしい生き方を実現していく場であり、歳をとっても、障害があっても、子育て中であっても、仕事に追われていても、コミュニティで自分らしい生き方を全うできることが、その人の尊厳を支えることになる。

その意味で、今後の地元における福祉のあり方をシステマチックに創造していく際、公的な福祉サービスや住民の福祉力の充実・整備を図ることが求められている。

コミュニティにおける身近な生活課題に対応する、新しいコミュニティでの支え合いを進めるための地域福祉の創造のあり方を検討することが課題。

新しい地域福祉の意義や役割、それを推進するために求められる条件などについて、皆様のご協力のもと研究させて頂いた。

(2) 研究の視点と方法

地方都市を活性化させるポイントは何か、ソーシャルキャピタルという考え方は活用できるのか、という問題意識から、地域を調査させて頂いた。

調査の視点として、①「コミュニティの主体的な協働と協創」と②「対象コミュニティ別の暮らしのサポート実践」に着目した。

研究方法として、社会福祉学のみならず、歴史学・社会政策学・社会心理学・幸福学・医療の知見を活用し、フィールドワークと研究者間のディスカッションにより考察を深めさせて頂いた。

(3) フィールドワークの分担

本研究では、次のとおり中部学院大学を中心とした県内各大学の研究者等で行なった。また、宮嶋ゼミナールの学生も多く参加させて頂いた。

1. 歴史調査（第2章関係）・・・大藪元康（中部学院大学准教授）
2. 子ども・子育て実践調査（第3章関係）・・・宮嶋 淳（中部学院大学教授）・同ゼミ員
3. 主体形成と地域福祉文化「大人の地域デビュー」調査（第4章関係）・・・田村禎章（ユマニテク医療福祉大学校）・宮嶋 淳（前掲）

(4) 倫理的配慮

本研究は、中部学院大学・中部学院大学短期大学部倫理委員会の審査を経て行わせて頂いた。

(5) 研究の結果

1. 従来の地域福祉の枠組みや理論のみでは、乗り越えることが難しい。
2. 新理論を提示する必要がある。
3. 新理論へのヒント
 - ①ソーシャルワークのエコロジカル・アプローチを用い、コミュニティ理解を拡大
 - ②医療・看護・生命科学の視点を取り入れられないか
 - ③地域を「法人 (生き物)」とみなし、地域を「有機物 (生命)」とみなすアプローチを検討

(6) 考 察

一連の調査研究から筆者が導いた新理論は、以下の図のような構造イメージである。

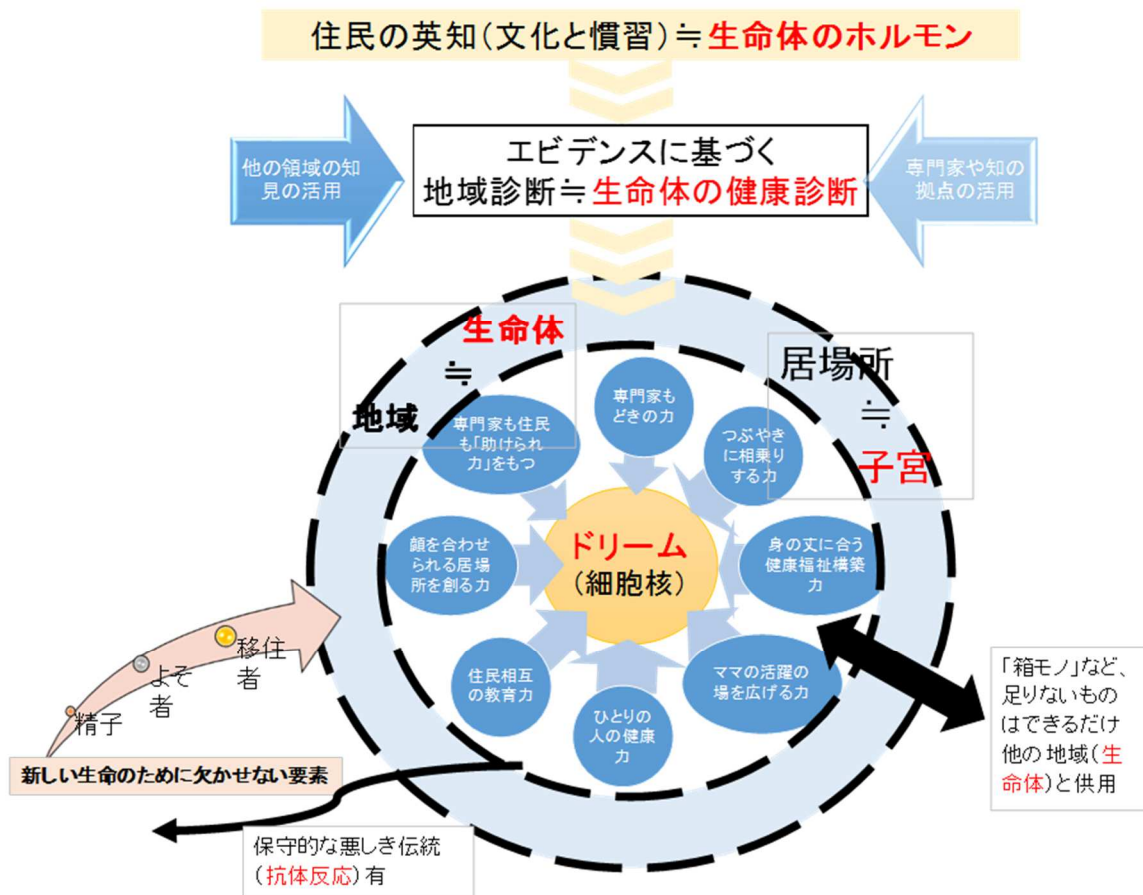


図 地域生命学的アプローチの構造

III. 出版物の内容

(1) 目次 本書は以下の8章から構成。

- 第1章 求められる協働・教育・協創のメカニズム
- 第2章 地域を歴史の視点から捉える
- 第3章 一緒に成長できる街
- 第4章 主体の形成・参画・デビューの「文化」性
- 第5章 ともに生きるためのつながりをつくる
- 第6章 ここで「安心」、「やすらぎ」の風土化
- 第7章 シンポジウム：「地方消滅」時代の新しい地域福祉のあり方
ー求められる協働・教育・協創のメカニズムー
- 第8章 地方発、新たな理論－CLSアプローチ－

(2) 各章の概略

第1章では、現在のわが国で進められている地域づくりの政策をレビューし、一地方都市がどのような影響を受けているのかを概観した。政策動向を福祉の視点、とくに地域福祉の理論からどのように理解し、アプローチしていくのか、筆者の認識を示した。

第2章では、現在の山口市が形成されるまでの歴史を振り返り、地域が行政区として自治を形作っていく様を眺望した。そのなかで、災害に直面した場合の自治体の「主体」としての特質を検討している。その到達点としての「主体－計画－歴史化」に注目している。

第3章では、「元気なママたち」が元気で居続けられる活動を自分たちの力で起こし、広げ、定着させていった経緯をレポートした。そうした動きは「ママの幸せこそ、子どもの幸せ」や「ママこそがソーシャルキャピタル」という理念を具現化したものであると分析できることを示した。そして理念が具現化していくためのポイントとは何かをソーシャルワーク実践理論から考察している。

第4章では、「福祉教育」を「幸せづくり教育」と捉えている。従前、「福祉教育」というと子ども中心に捉えられていた。その枠組みを越えて「大人の地域デビュー」を「大人の『幸せづくり』教育へのデビュー」と捉えて、事例研究を行なっている。

第5章では、「年をとること」を当事者目線で真正面から捉え、「輝く高齢者＝笑顔が素敵で素敵な高齢者」のための生き様を検討している。

第6章では、『今、ここにある』懐かしいものを風化させずに、生かす方法と視点を提示した。われわれにとって「冠婚葬祭」の意味は何だったのか、あるいは「われわれにとっての魂のやすらぎ」とは、どのようなことなのだろうかを検討している。

第7章では、地域における実践の理論化を展望する。前章までの議論を踏まえ、まち・ひと・くらしのソーシャルな関係と開発の焦点を見据えた座談会を実施した。座談会においては、ソーシャル・キャピタルとソーシャル・ディベロップメントの視点から、地域創生の現在を担う地元と大学双方の関係者による協働・教育・協創の展望を中心に語って頂いた。

そして第8章では、本書を構成する全体（調査・研修・語り）を通して得た知見や示唆をエビデンスとして、筆者による学術的ディスカッションを行い構築した、地方の「生き残り」のための実践理論を提示している。私たちが提示する地域生命学的アプローチ（Community Life Science Approach：CLSアプローチ）は、看護学や生殖医療、生命科学の視点を持つ、福祉研究者ならではのユニークなものとなっている。

IV. 私たちの提案

(1) 今を「チェックしなおす」

私たちは、「無いから創る」ではなく今を「チェックしなおす」から始め、解釈を変更する視点を持つとした。現在の複雑な地域の問題を分解して問題解決型で対応していこうとすればするほど、ゴールが見えなくなるジレンマに陥る可能性が増すのではないか。

(2) 既存の理論を発展させる

着目したのは「ミラーの一般生命システム理論 (general Living systems theory)」。これは一般システム理論の派生的理論。ミラーは、生命システムが開かれたシステムであり、物質やエネルギーがある「境界」を通して出入りでき、その「境界」は階層性を有していると考えた。その階層とは「細胞、器官、生体、集団、組織、社会、超国家」と7つのレベルがある。ミラーの理論は、以下の点で評価されている。

- ① 社会は「生命システム」である
- ② 進化論的な枠組み
- ③ 創発性 (=人間の能力が社会、文化に展開していく性質)
- ④ 生命システムの自己制御性への着眼
- ⑤ 情報理論の取り入れ

しかし、提起された時代の制約としての生命科学の不透明さを背景として、浸透しなかった。

(3) C L Sアプローチによる地域の見立て (例)

- ① 人と人の絆の在り様を、一般生命システム理論を活用して、生態学的に解釈する
- ② 女性性の固有性は「新しい生命を生み出す」「活性化する」。それが維持され、そのプロセスが生命体のメカニズムとして、ケアされなければならない。
- ③ 新しい生命を生み出す機能は、「創発・再生・伝承」を地域に維持させる。
- ④ 地域は、次世代を生み育てていく母体。「地域=母体=生命体」であり、次世代を生み出す活性 = 「女性」であり「母親」のみがもつ固有性。
- ⑤ 「地域とは生命体であり、その特性から捉えると女性性を持つ生命体である」と認識する。
- ⑥ 次世代を生み、育てるという特性・機能に着目すれば、地域における構成員の居場所=子宮を想起すると、多くのメカニズムの説明がつく。

(4) 結論

当該地方都市が「消滅」を乗り越えるための焦点は、少なくとも次のようなメカニズムを必要とする。

- ① これからのコミュニティは「田舎=共同体、都会=集合体」ではなく、オルタナティブな着想を必要としている。
- ② 「プロブレム(問題)」ではなく「ドリーム(夢)」からコミュニティの構築をすすめる。
- ③ 人々の「つぶやき」に相乗りすることが「面白い」という感覚を持てるキーマンがいるとき、予期せぬ「創発」が起き、「ドリーム」へ近づけるかもしれない。
- ④ 緩やかな絆を持った新しい地域社会とは、公共体であり、「生き物である」という捉え方をしていく必要がある。
- ⑤ 「生き物である」共同体を生き活きとさせるためには、ルールは限定的に決め、絆を強めたり弱め

たり、生態学的志向が求められる。

- ⑥市民に関係するハイリスクな物は、周辺のシティと共同で対応を考える。
- ⑦「身の丈に合う」保健医療福祉の構築を皆で進め、皆が役割を持てると、人は輝ける。
- ⑧誰でも「助けて」と他人に言えることとそれを尊重できる力が、まちの風土を育てる。
- ⑨まちを創るためには、専門家も必要で、専門家によく似た人も必要である。
- ⑩人々は、「居心地の良い場所」をたくさん作ることで、「互恵性」の意識が育つ。

お世話になった皆様

山口市 林市長様 山口市 宇野副市長様 山口市教育委員会 森田教育長様
山口市総務課様 山口市企画財政課様 山口市福祉課様 山口市健康介護課様 山口市美山支所様
山口市地域包括支援センター様 山口市社会福祉協議会様 山口市地域おこし協力隊様
(株)水生活製作所様 (株)オンダ製作所様 (有)花村製作所様 NPO 法人 Kaba's Fam 様
NPO 法人どんぐり会様 青波福祉プラザ様 四国山香りの森公園様 文化の里古田記念館様
グリーンプラザみやま様 高富中央公民館様 歴史民俗資料館様 社福法人同朋会(伊自良苑)様
子どもげんきはうす様 高富児童館様 ピッコロ療育センター様 中部学院大学関係者の皆様

関連する研究成果

【著書】 本書

日本子ども NPO センター編(2015)『子ども NPO 白書 2015(創刊号)』エイデル研究所
子どもの文化研究所編(2016)『子どもの文化』2016.3.

【論文】

宮嶋淳他(2016)「子育てバリアフリー指標の生成—岐阜県・山口市における子ども関連施設調査より—」『人間福祉学会誌』15(1)
宮嶋淳他(2016)「地方都市『消滅』を乗り越える！—G 県 Y 市からの提言—」『福祉図書文献研究』15

【紹介】

宮嶋淳(2016.4.)「この一冊！」『日本社会福祉教育学会 News Letter』27、日本社会福祉教育学会

【発表】

宮嶋淳・小木曾加奈子(2016.6.27.)Presentation of our new theory of developing communities: The Approach of Communal Life Science, *Joint World Conference on Social Work, Education and Social Development 2016*
大藪元康(2016.6.12)「地域福祉計画・地域福祉活動計画策定における災害史の視点の必要性」日本地域福祉学会第 30 回大会
宮嶋淳・小木曾加奈子・大藪元康・大井智香子・田村禎章(2016.4.23.)「地方都市『消滅』を乗り越えるCLSアプローチ—G県Y市におけるフィールドワークに基づく実践理論の構築—」日本社会福祉学会中部ブロック研究集会
棚橋千弥子・柴田由美子・宮嶋淳・小木曾加奈子(2015.11.6.)「中高年からの身体の健康づくりの現状と支援」日本看護学会学術集会
宮嶋淳他(2015.9.20.)「中山間地域における介護予防事業の効果と発展のための焦点—A 市における「いきいき健康塾」参加者へのアンケート調査の結果より—」日本社会福祉学会秋季大会
大藪元康(2015.6.21)「地域福祉推進に向け地域の歴史を捉える必要性」日本地域福祉学会第 29 回大会